

源氏物語

絵合

紫式部

青空文庫

あひがたきいつきのみことおもひてき
 さらに遥はるかになりゆくものを（晶子）

前齋宮ぜんさいいぐうの入内じゆだいを女院は熱心に促しておいになつた。こまごまとした入用の品々もあろうがすべてを引き受けてする人物がついていないことは氣の毒であると、源氏は思いながらも院への御遠慮があつて、今度は二条の院へお移しすることも中止して、傍觀者らしく見せてはいたが、大體のことは皆源氏が親らしくしてする指図さしずで運んでいった。院は残念がつておいでになつたが、負けた人は沈黙すべきであると思おぼしめ召して、手紙をお送りになることも絶えた形であつた。しかも当日になつて院からのたいしたお贈り物が来た。御衣服、櫛くしの箱、乱れ箱、香壺かうごの箱には幾種類かの薰香くんかうがそろえられてあつた。源氏が拝見することを予想して用意あそばされた物らしい。源氏の来ていた時であつたから、女に別当よべつとうはその報告をして品々を見せた。源氏はただ櫛の箱だけを丁寧ていねいに拝見した。繊細な技巧でできた結構な品である。挿さし櫛のはいった小箱につけられた飾りの造花に御歌が書かれてあつた。

別れ路ぢに添へし小櫛をかごとにてはるけき中と神やいさめし

この御歌に源氏は心の痛くなるのを覚えた。もつたいないことを計らつたものであると、源氏は自身のかつてした苦しい思いに引き比べて院の今のお心持ちも想像することができ、てお気の毒でならない。齋王として伊勢へおいでになる時に始まつた恋が、幾年かの後に神聖な職務を終えて女によ王おが帰京され御希望の実現されてよい時になつて、弟君の陛下の後こうきゆう宮へその人がはられるということとどんな気があそばすだろう。閑暇かんかな地位へお退のきになつた現今の院は、何事もなしうる主権に離れた寂しさというようなものをお感じにならないであろうか、自分であれば世の中が恨めしくなるに違いないなどと思うと心が苦しくて、何故女王を宮中へ入れるようなよけいなことを自分は考えついで御心みこころを悩ます結果を作つたのであろう、お恨めしく思われた時代もあつたが、もともと優しい人情深い方であるのにと、源氏は歎息たんそくをしながらしばらく考え込んでいた。

「この御返歌はどうなさるだろう、またお手紙もあつたでしょうがお答えにならないではいけないでしょう」

などと源氏は言つてもいたが、女房たちはお手紙だけは源氏に見せることをしなかつた。宮は気分がおすぐれにならないで、御返歌をしようとされないので、

「それではあまりに失礼で、もつたいないことでございます」

こんなことを言つて、女房たちが返事をお書かせしようと苦心している様子を知ると、源氏は、

「むろんお返事をなさらないではいけません。ちよつとだけでよいのですからお書きなさ
い」

と言つた。源氏にそう言われることが齋宮にはまたお恥ずかしくてならないのであつた。昔を思い出して御覧になると、艶えんに美しい帝みかどが別れを惜しんでお泣きになるのを、少女おとめごころ心においたわしくお思いになつたことも目の前に浮かんできた。同時に、母君のことも思われてお悲しいのであつた。

別るとてはるかに言ひしひとこと言もかへりて物は今ぞ悲しき

とだけお書きになつたようである。お使いの幾人かはそれぞれ差のあるいただき物をし

て帰った。源氏は齋宮の御返歌を知りたかつたのであるが、それも見たいとは言えなかつた。院は美男でいらせられるし、女王もそれにふさわしい配偶のように思われる、少年でいらせられる帝の女御にょみにおさせすることは、女王の心に不満なことであるかもしれないなどと思いやりのありすぎることまでも考えてみると、源氏は胸が騒いでならなかつたが、今日になつて中止のできることもなかつたから儀式その他についての注意を言い置いて、親しい修理大夫参議しゆりだゆうさんぎである人にすべてを委託して源氏は六条邸を出て御所へ参つた。養父として一切を源氏が世話していることにしては院へ濟まないという遠慮から、単に好意のある態度を取つているというふうを示していた。もとからよい女房の多い宮であつたから、実家に引いていがかちだつた人たちも皆出て来て、すでにはなやかな女御の形態が調つたやうに見えた。御息所みやすどころが生きていたならば、どんなにこうしたことをよろこぶことであろう、聡明そうめいな後見役として女御の母であるのに最も適した性格であつたと源氏は故人が思い出されて、恋人としてばかりでなく、あの人を失つたことはこの世の損失であるとも源氏は思つた。洗練された高い趣味の人といつても、あれほどにすぐれた人は見いだせないのであると、源氏は物のおりごとに御息所を思つた。

このごろは女院も御所に来ておいでになつた。帝は新しい女御の参ることをお聞きにな

つて、少年らしく興奮しておいでのになった。御年齢よりはずっと大人びた方なのである。女院も、

「りっぱな方が女御に上がって来られるのですから、お気をおつけになってお逢いなさい」と御注意をあそばした。帝は人知れず大人の女御は恥ずかしいであろうと思召されたが、深更になってから上の御局みつぼねへ上がって来た女御は、おとなしいおおような、そして小柄な若々しい人であったから自然に愛をお感じになった。弘徽殿こうきでんの女御は早くからおそばに上がっていたからその人を睦まじい者に思召され、この新女御しんによごは品よく柔らかい魅力があるとともに、源氏が大きな背景を作って、きわめて大事に取り扱う点で侮りがたい人に思召されて宿直とくいに召される数は正しく半々になっていたが、少年らしくお遊びになる相手には弘徽殿がよくて、昼などおいでになることは弘徽殿のほうが多かった。権中納言きんちゅうなきは后にも立てたい心で後宮に入れた娘に、競争者のできたことで不安を感じていた。

院は櫛くしの箱の返歌を御覧になってからいつそう恋しく思召された。ちょうどそのころに源氏は院へ伺候した。親しくお話を申し上げているうちに、齋宮が下向されたことから、院の御代みよの齋宮の出発の儀式にお話が行った。院も回想していろいろとお語りになったが、ぜひその人を得たく思っていたとはお言いにならないのである。源氏はその問題を全然知

らぬ顔もしながら、どう思召していられるかが知りたくて、話をその方向へ向けた時、院の御表情に失恋の深い御苦痛が現われてきたのをお気の毒に思った。美しい人としてそれほど院が忘れがたく思召す前齋宮は、どんな美貌びぼうをお持ちになるのであろうと源氏は思つて、おりがあればお顔を見たいと思つているが、その機会の与えられないことを口惜くちおしがつていた。貴女らしい奥深さをあくまで持つていて、うかとして人に見られる隙すきのあるような人でない齋宮の女御を源氏は一面では敬意の払われる養女であると思つて満足しているのであつた。

こんなふうすきまに隙間もないふうすきまに二人の女御が侍しているのであつたから、兵部卿ひょうぶぎょうの宮は女王の後宮入りを実現させにくくて煩悶はんもんをしておいでになつたが、帝が青年におなりになつたなら、外戚の自分の娘を疎外あそばすことはなからうとなお希望をつないでおいでになつた。宮廷の二人の女御ははなやかに挑いどみ合つた。帝は何よりも絵に興味を持つておいでになつた。特別にお好きなせいかお描かきになることもお上手じょうずであつた。齋宮の女御は絵をよく描くのでそれがお氣に入つて、女御の御殿へおいでになつてはごいっしょに絵をお描きになることを楽しみにあそばした。殿上の若い役人の中でも絵の描ける者を特にお愛しになる帝であつたから、まして美しい人が、雅味がみのある絵を上手に墨で描いて、

からだを横たえながら、次の筆の下ろしようを考えたりしている可憐さが御心に沁んで、しばしばこちらへおいでになるようになり、御寵愛が見る見る盛んになった。権中納言がそれを聞くと、どこまでも負けぎらいな性質から有名な画家の幾人を家にかかえて、よい絵をよい紙に、描かせることをひそかにさせていた。

「小説を題にして描いた絵が最もおもしろい」

と言つて、権中納言は選んだよい小説の内容を絵にさせているのである。一年十二季の絵も平凡でない文学的価値のある詞書きをつけて帝のお目にかけて。おもしろい物であるがそれは非常に大事な物らしくして、帝のおいでになつての間にも、長くは御前へ出さず置かずにしまわせてしまうのである。帝が齋宮の女御に見せたく思召して、お持ちになろうとするのを弘徽殿の人々は常にはばむのであつた。源氏がそれを聞いて、

「中納言の競争心はいつまでも若々しく燃えているらしい」
などと笑つた。

「隠そう隠そうとしてあまり御前へ出さずに陛下をお悩ましするなどということはけしからんことだ」

と源氏は言つて、帝へは

「私の所にも古い絵はたくさんございますから差し上げることにはいたしましょう」

と奏して、源氏は二条の院の古画新画のはいった棚たなをあけて夫人といっしよに絵を見分けた。古い絵に属する物と現代的な物とを分類したのである。長恨歌、王昭君などを題目にしたのはおもしろいが縁起はよろしくない。そんなのを今度は省くことに源氏は決めたのである。旅中に日記代わりに描いた絵巻のはいった箱を出して来て源氏ははじめて夫人にも見せた。何の予備知識を備えずに見る者があつても、少し感情の豊かな者であれば泣かずにはいられないだけの力を持った絵であつた。まして忘れようもなくその悲しかった時代を思っている源氏にとつて、夫人にとつて今また旧作がどれほどの感動を与えるものであるかは想像するにかたくはない。夫人は今まで源氏の見せなかつたことを恨んで言った。

「一人居ひて眺ながめしよりは海人あまの住むかたを書きてぞ見るべかりける

あなたにはこんな慰めがおありになつたのですわね」

源氏は夫人の心持ちを哀れに思つて言つた。

「うきめ見しそのをりよりは今日はまた過ぎにし方に帰る涙か

中宮ちゆうぐうにだけはお目にかけてねばならない物ですよ」

源氏はその中のことにできのよいものでしかも須磨すまと明石あかしの特色のよく出ている物を一帖じょうずつ選んでいながらも、明石の家の描かかれてある絵にも、どうしてあるであろうと、恋しさが誘われた。源氏が絵を集めていると聞いて、権中納言はいつそう自家で傑作をこしらえることに努力した。巻物の軸ひもと、紐ひもの装幀そうていにも意匠を凝らしているのである。それは三月の十日ごろのことであつたから、最もうらかな好季節で、人の心ものびのびとしておもしろくばかり物が見られる時であつたし、宮廷でも定まつた行事の何も無い時で、絵画や文学の傑作をいかにして集めようかと苦心をするばかりが仕事になつていた。これを皆陛下へ差し上げることにして公然の席で勝負を決めるほうが興味のあつてよいことであると源氏がまず言い出した。双方から出すのであるから宮中へ集まつた絵巻の数は多かつた。小説を絵にした物は、見る人がすでに心に作つてゐる幻想をそれに加えてみることによつて絵の効果が倍加されるものであるからその種類の物が多い。梅壺うめつぼの王女御おうによびのほ

うのは古典的な価値の定まった物を絵にしたのが多く、弘徽殿のは新作として近ごろの世間に評判のよい物を描かせたのが多かったから、見た目のにぎやかで派手はでなのはこちらにあった。典ないしのすけ侍ないしや内侍みょうぶや命婦も絵の価値を論じることに一所懸命はになっていた。女院も宮中においてになるころであつたから、女官たちの論議する者を二つにして説をたたかわせて御覧みになつた。左右に分けられたのである。梅壺うづ方は左で、平へい典てん侍じ、侍従の内侍、少将の命婦などで、右方は大弐だいにの典侍、中将の命婦、兵衛ひょうえの命婦などであつた。皆世間から有識者として認められている女性である。思い思いのことを主張する弁論を女院は興味深く思おほしめ召めして、まず日本最初の小説である竹取の翁おきなと空穂うつほの俊とし蔭かげの巻を左右にして論評をお聞きになつた。

「竹取の老人と同じように古くなつた小説ではあつても、思い上がった主人公の赫耶かくや姫の性格に人間の理想の最高のものが暗示おぼされていいてよいのです。卑近なことばかりがおもしろい人にはわからないでしょうが」

と左は言う。右は、

「赫耶姫の上つた天上の世界というものは空想の所産にすぎません。この世の生活の写しである所はあまりに非貴族的で美しいものではありません。宮廷の描写などは少しもない

ではありませんか。赫耶姫は竹取の翁の一つの家を照らすだけの光しかなかったようですね。安部の多が大金で買った毛皮がめらめらと焼けたと書いてあったり、あれだけ蓬萊の島を想像して言える倉持の皇子が贖物を持って来てごまかそうとしたりするところがとてもいやです」

この竹取の絵は巨勢の相覧の筆で、詞書きは貫之がしている。紙屋紙に唐錦の縁が付けられてあつて、赤紫の表紙、紫檀の軸で穩健な体裁である。

「俊蔭は暴風と波に弄ばれて異境を漂泊しても芸術を求める心が強くて、しまいには外国にも日本にもない音楽者になつたという筋が竹取物語よりずっとすぐれております。それに絵も日本と外国との対照がおもしろく扱われている点ですぐれております」

と右方は主張するのであつた。これは式紙地の紙に書かれ、青い表紙と黄玉の軸が付けられてあつた。絵は常則、字は道風であつたから派手な気分には満ちている。左はその点が不足であつた。次は伊勢物語と正三位が合わされた。この論争も一通りでは済まない。今度も右は見た目がおもしろくて刺戟的で宮中の模様も描かれてあるし、現代に縁の多い場所や人が写されてある点でよさそうには見えた。平典侍が言った。

「伊勢の海の深き心をたどらずて古りにし跡と波や消つべき

ただの恋愛談を技巧だけで綴つてあるような小説に業平朝臣を負けさせてなるもので
すか」

右の典侍が言う。

雲の上に思ひのぼれる心には千尋の底もはるかにぞ見る

女院が左の肩をお持ちになるお言葉を下された。

「兵衛王の精神はりっぱだけれど在五中将以上のものではない。」

見るめこそうらぶれぬらめ年経にし伊勢をの海人の名をや沈めん」

婦人たちの言論は長くかかつて、一回分の勝負が容易につかないで時間がたち、若い女房たちが興味をそれらに集めている陛下と梅壺の女御の御絵はいつ席上に現われるか予想

ができないのであった。源氏も参内して、双方から述べられる支持と批難の言葉をおもしろく聞いた。

「これは御前で最後の勝負を決めましょう」

と源氏が言つて、絵合わせはいっそう広く判者を求めることになった。こんなこともかねて思われたことであつたから、須磨、明石の二巻を左の絵の中へ源氏は混ぜておいたのである。中納言も劣らず絵合わせの日に傑作を出そうとすることに没頭していた。世の中はもうよい絵を製作することと、捜し出すことのほかに仕事がないように見えた。

「今になつて新しく作ることは意味のないことだ。持っている絵の中で優劣を決めなければ」

と源氏は言つているが、中納言は人にも知らせず自邸の中で新画を多く作らせていた。院もこの勝負のことをお聞きになつて、梅壺へ多くの絵を御寄贈あそばされた。宮中で一年じゆうにある儀式の中のおもしろいのを昔の名家が描いて、延喜えんぎの帝が御自身で説明をお添えになつた古い巻き物のほかに、御自身の御代みよの宮廷にあつたはなやかな儀式などを描かせになつた絵巻には、齋さいくわう宮発足の日の大極殿だいごくでんの別れの御櫛みくしの式は、御心みこころに沁しみんで思召されたことなのであつたから、特に構図なども公茂きんもちがはく画伯に詳しくお指図さしずをあそ

ばして製作された非常にりつぱな絵もあつた。沈しんの木の透かし彫りの箱に入れて、同じ木で作つた上飾りを付けた新味のある御贈り物であつた。御挨拶あいさつはただお言葉だけで院の御所への勤務もする左近の中將がお使いをしたのである。大極殿の御輿みこしの寄せてある神々しい所に御歌があつた。

身こそかくしめの外ほかなれそのかみの心のうちを忘れしもせず

と言うのである。返事を差し上げないこともおそれおおいことであると思われて、齋宮の女御は苦しく思いながら、昔のその日の儀式に用いられた簪かんざしの端を少し折つて、それに書いた。

しめのうちは昔にあらぬこちして神代のことも今ぞ恋しき

藍色あゐの唐紙に包んでお上げしたのであつた。院はこれを限りもなく身に沁しんで御覧になつた。このことで御位みくらゐも取り返したく思召した。源氏をも恨めしく思召されたに違いな

い。かつて源氏に不合理な嚴罰をお加えになつた報いをお受けになつたのかもしれない。院のお絵は太後の手を経て弘徽殿こうきでんの女御にょごのほうへも多く来てゐるはずである。尚なほ侍しつかみも絵の趣味を多く持つてゐる人であつたから、姪めいの女御のためにいろいろと名画を集めていた。

定められた絵合わせの日になると、それはいくぶんにわかなことではあつたが、おもしろく意匠をした風流な包みになつて、左右の絵が会場へ持ち出された。女官たちの控え座敷に臨時の玉座が作られて、北側、南側と分かれて判者が座についた。それは清涼殿せいりょうでんのことで、西の後涼殿の縁には殿上役人が左右に思い思いの味方をしてすわつていた。左の紫檀したんの箱に蘇枋すおうの木の飾り台、敷き物は紫地の唐錦からにしき、帛紗ふくさは赤紫の唐錦である。六人の侍童の姿は朱色の服の上に桜襲さくらがさねの汗衫かざみ、衱あこめは紅の裏に藤襲ふじがさねの厚織物で、からだのとりなしがきわめて優美である。右は沈せんの木の箱に浅香せんこうの下机したつくえ、帛紗ふくさは青地の高麗錦こうらいにしき、机あしの脚あしの組み紐ひもの飾りがはなやかであつた。侍童らは青色に柳かざみの色の汗衫かざみ、山吹襲やまぶきかさねの衱あこめを着ていた。双方の侍童がこの絵の箱を御前すに据えたのである。源氏の内大臣と権中納言とが御前へ出た。太宰帥だざいのそつの宮も召されて出ておいでになつた。この方は芸術に趣味をお持ちになる方であるが、ことに絵画がお好きであつたから、初めに源氏が

らこのお話もしてあつた。公式のお召しではなくて、殿上の間に来ておいでになつたのに仰せが下つたのである。この方に今日の審判役を下命された。評判どおりに入念に描かれた絵巻が多かつた。優劣をにわかにお決めになるのは困難なようである。例の四季を描いた絵も、大家がよい題材を選んで筆力も雄健に描き流した物は価値が高いように見えるが、今度は皆紙絵であるから、山水画の豊かに描かれた大作などとは違つて、凡庸な者に思われてゐる今の若い絵師も昔の名画に近い物を作ることができ、それにはまた現代人の心を惹くものも多量に含まれていて、左右はそうした絵の優劣を論じ合つてゐるが、今日の論争は双方ともまじめであつたからおもしろかつた。襖からかみ子をあけて朝餉あさぐれいの間に女院は出ておいでになつた。絵の鑑識に必ず自信がおりになるのであろうと思つて、源氏はそれさえありがたく思われた。判者が断定のしきれないような時に、お伺いを女院へするのに対して、短いお言葉の下されるのも感じのよいことであつた。左右の勝ちがまだ決まらずに夜が来た。最後の番に左から須磨の巻が出てきたことによつて中納言の胸は騒ぎ出した。右もことに最後によい絵巻が用意されていたのであるが、源氏のような天才が清澄な心境に達した時に写生した風景画は何者の追隨をも許さない。判者の親王をはじめとしてだれも皆涙を流して見た。その時代に同情しながら想像した須磨よりも、絵によつて教え

られる浦住まいはもつと悲しいものであった。作者の感情が豊かに現われていて、現在をもその時代に引きもどす力があつた。須磨からする海のながめ、寂しい住居すまい、崎々浦々が皆あざやかに描かれてあつた。草書で仮名混じりの文体の日記がその所々には混ぜられてある。身にしむ歌もあつた。だれも他の絵のことは忘れて恍惚こうこつとなつてしまった。圧巻はこれであると決まつて左が勝ちになつた。

明け方近くなつて古い回想から湿つた心持ちになつた源氏は杯を取りながら帥そつの宮に語つた。

「私は子供の時代から学問を熱心にしていましたが、詩文の方面に進む傾向があると御覧になつたのですか、院がこうおっしゃいました、文学というものは世間から重んぜられるせいか、そのほうのことを専門的にまでやる人の長寿と幸福を二つともそろつて得ている人は少ない。不足のない身分は持つているのであるから、あながちに文学で名誉を得る必要はない。その心得でやらねばならないつて。以来私に本格的な学問をいろいろとおさせになりましたが、できが悪い課目もなく、またすぐれた深い研究のできたこともありません。絵を描くことだけは、それは大きいことではありませんが、満足のできるほど精神を集中させて描いて見たいという希望がおりおり起こつたものですが、思いがけなく

放浪者になりました時に、はじめて大自然の美しさにも接する機会を得まして、描くべき物は十分に与えられたのですが、技巧がまずくて、思いどおりの物を紙上に表現することはできませんでした。そんなものですからこれだけをお目にかけることは恥ずかしくてい
たされませんから、今度のような機会に持ち出したただけなのですが、私の行為が突飛とつびなよ
うに評されないかと心配しております」

「何の芸でも頭がなくては習えませんが、それでもどの芸にも皆師匠があつて、導く道が
できているものですから、深さ浅さは別問題として、師匠の真似まねをして一通りにやるだけ
のことはだれにもまずできるでしょう。ただ字を書くことと囲碁だけは芸を熱心に習つた
とも思われない者からもひよつくりりつばな書を書く者、碁の名人が出ているものの、や
はり貴族の子の中からどんな芸も出抜けてできる人が出るように思われます。院が御自身
の親王、内親王たちに皆何かの芸はお仕込みになつたわけですが、その中でもあなたへは
特別に御熱心に御教授あそばしましたし、熱心にもお習いになつたのですから、詩文のほ
うはむろんごりつばだし、そのほかでは琴きんをお弾ひきになることが第一の芸で、次は横笛、
琵琶びわ、十三絃げんという順によくおできになる芸があると院も仰せになりました。世間もそう
信じているのですが、絵などはほんのお道楽だと私も今までは思っていましたのに、あま

りにお上手過ぎて墨絵描きの画家が恥じて死んでしまふ恐れがある傑作をお見せになるのは、けしからんことかもしれません」

宮はしまいには戯談をお言いになつたが酔い泣きなのか、故院のお話をされておられておしまいになつた。二十幾日の月が出てまだここへはさしてこないのであるが、空には清い明るさが満ちていた。書司に保管されてある楽器が召し寄せられて、中納言が和琴の弾き手になつたが、さすがに名手であると人を驚かす芸であつた。帥の宮は十三絃、源氏は琴、琵琶の役は少将の命婦に仰せつけられた。殿上役人の中の音楽の素養のある者が召されて拍子を取つた。稀なよい合奏になつた。夜が明けて桜の花も人の顔もほのかに浮き出し、小鳥のさえずりが聞こえ始めた。美しい朝ぼらけである。下賜品は女院からお出しになつたが、なお親王は帝からも御衣を賜わつた。この当座はだれもだれも絵合わせの日の絵の噂をし合つた。

「須磨、明石の二巻は女院の御座右に差し上げていただききたい」

こう源氏は申し出た。女院はこの二巻の前後の物も皆見たく思召すとのことであつたが、「またおりを見まして」

と源氏は御挨拶を申した。帝が絵合わせに満足あそばした御様子であつたのを源氏は

性にしてみようと思う精神と出家のことは両立しないのであるから、どっちがほんとうの源氏の心であるかわからない。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

絵合

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>